

<動向>

第7回関学レインボーウィークを中心とした 関西学院における多様性尊重の取り組み： Kwansei Grand Challenge 2039 にむけて

武田 丈・織田 佳晃

私には夢がある。いつの日かこの国が立ち上がり、「すべての人間は平等なものとして創造されたということは自明の真理である」という建国の信条が、真の意味で実現されることを。…私には夢がある。いつの日か、私の4人の小さな子供たちが、肌の色ではなく人格で評価される国で暮らすことを。(筆者訳)

上記は、1963年8月28日にワシントンDCのリンカーン記念館において米国の公民権運動のリーダーであったマーティン・ルーサー・キング牧師が行った有名な演説「I have a dream」の一部抜粋である。この演説から半世紀以上が経過した米国は、未だにマイノリティに対するヘイトクライムがあったり、マイノリティに対して差別的な発言をする国のリーダーが存在したりもするが、その一方でアフリカ系アメリカ人の大統領の誕生や同性婚の全米での合法化といった、多様性尊重に関する進展も見られる。翻って日本社会はどうかであろうか。また関西学院はどうかであろうか。

本稿では、「This is Me! 私を束ねないで」をテーマに2019年5月13日から17日にかけて開催された第7回関学レインボーウィーク（以下、KGRW）をプログラムごとに振り返ったのちに、KGRWを中心とした関西学院における多様性尊重にむけての活動の進捗状況を報告する。

1. KGRW2018のプログラム内容

(1) オープニングイベント

「より多くの学生にKGRWのことを知ってもらおう、その趣旨を理解してもらおう」ということを目的としたオープニングイベントを、KGRWの初日にあたる5月13日（月）の昼休みに、中央芝生で100名近くの参加者が集まって開催された。虹のようにアーチ型に飾れた色とりどりの風船が風にそよめくステージでは、村田学長による開会の挨拶や松岡人権教育研究室室長のウィークの趣旨説明に続き、聴衆者たちの持つレインボーフラッグがはためくなか、ゲストのKen with LilyがKGRWのテーマソングとして書き下ろした「ぐるぐる踊る」など3曲の楽曲を披露してくれた。「♫男は男らしく、女は女らしく、そんな時代に終わりを告げよう。…I don't care 他人なんて。自分らしさ失わないで。Rainbow それぞれの色が、Rainbow 光り輝くよ、Rainbow 本当の自分らしさ失わないで、Rainbow 新たな時代が、Rainbow これから始まるよ、Rainbow ありのままの自分らしく、Rainbow Be myself ♪」と唄う「Be myself」（作詞・作曲：KeNyo）という曲の歌詞に、参加者はさまざまな想いを馳せた。その後、参加者たちはその願いや想いを込めた色とりどりのリボンを、ステージに飾られた風船のアーチの土台に結びつ

けた。このアーチは、ウィーク期間中、以下のパネル展が開催されていた図書館エントランスホールに設置されたあと、最終日の夕方には「多様な性を祝う集い」の会場であるランバス礼拝堂の前に飾られた。

(2) パネル展

全教職員に対してメッセージ募集を行ってパネル数が増えたパネル展は、これまでのように「いのちリスペクト。ホワイトトリボン・キャンペーン」のパネルと共に、西宮上ヶ原、神戸三田、西宮聖和の3キャンパスで同時に実施された。例年以上にいただいた閲覧者からのメッセージには、「他者が云々ではなく、まず自分は何者かを問うて下さい。マジョリティに属していても、何故自分がマジョリティに居られるのかを真剣に考えましょう。そこから他者と向き合えるのです」、「『LGBTという言葉をやたらと使わなくていい社会に』同じことを思っている人たちがいた。それだけで涙が出てきた」、「多様性はみんなの問題です。自分事としてみんなが考えられる社会にしていきたいです。元関学生より」、「『わざわざこんな活動…あたりまえのことでしょ』ってくらいに認知度広まればいいですね。願っています」といったものがあつた。

(3) LGBT 関係図書の展示

今年度も関学図書館の企画として、昨年に続き KGRW が始まる以前の5月7日から5月24日まで、上ヶ原キャンパスの図書館1階のミニ特集コーナーにおいて、LGBTQ 関連の書籍の展示をしていただいた。

(4) 映画上映会

例年通り、今年度も以下のように映画上映会を開催した。

上ヶ原キャンパス：@大学図書館地下1階ホール「私はワタシ」(90分、日本)

5月14日(火) 13:30～15:00(参加者：10名)
15:10～16:40(参加者：4名)
16:50～18:20(参加者：10名)

「最初で最後のキス」(105分、イタリア)

5月16日(木) 13:30～15:00(参加者：15名)

(5) 交流会

性的マイノリティの当事者、もしくは当事者かもしれない学生たちを対象とし、互いに交流することを目的とした交流会を5月15日(水)の18時半から20時まで上ヶ原キャンパスにて実施した。性的マイノリティの当事者、当事者かもしれない学生で構成される関西学院大学非公認サークルのCASSISに所属している学生が中心となり、グランドルールの明記や座席の工夫を行うことを通じ、できる限り安全な場を作ることを心がけて企画された。当日はサークルに所属しない人や初めてコミュニティに参加する人なども含む23名の学生が集い、ともに食事を囲みながら会話を楽しむ賑やかな交流会となった。

(6) 人権問題講演会

毎年関学レインボーウィーク中に開催される多様性尊重をテーマとした大学主催の人権問題講演会は、5月17日(金)の2限に西宮上ヶ原キャンパス(参加者：約110名)で、5月20日(月)3限には神戸三田キャンパス(参加者：約85名)で開催された。今年度の講師はNHK Eテレ「バリバラ」のコメンテーターとしておなじみの玉木幸則氏で、「自分らしく生きる～多様性を認めていく中から生まれるフルインクルージョン～」と題してお話いただいた。ご自身が活動の中で目指している「フルインクルージョン(完全な共生社会をつくっていくこと)」の考え方を、障害を例に法的根拠、合理的配慮、優生思想などに焦点をあてながらわかりやすく説明され、「障害のある人もない人も助け合いながらその人らしい暮らしを実現していける社会を目指すこと」の重要性を訴えられた。参加者からは以下のような感想をいた

だいた。

今の社会はインテグレーションの社会システムを完成させることで満足してしまっていることに気づかされました。特定の人たちにフォーカスして“多様性”を考えるのではなく、私たち全員が生きやすい、多様性のある社会について考えたいと思いました。

勝手に私が持ってしまう障害を持っている方々へのイメージがとても変わった気がします。障害＝不幸という考えは本人がどう思うかであって、間違った考えだなと思うことができました。

LGBT 当事者です。私も自分のセクシュアリティ、自分らしさを考えていくうちに、LGBT だけの問題ではなく、日本人の潜在意識の中に入り込んだ優性思想や他人への過干渉などのせいで生きづらい人はたくさんいると思いました。当事者のコミュニティに入ると、「当事者性」を求められるのもつらくて、「私はわたしだなあ」と最近思ったところなのですが、「幸せは自分が決める」という言葉にハッとさせられました。

何かしら障害を持って生まれた人に対して“かわいそう”や“ちゃんと生んでやりたかった”などの気持ちを持つことは、実はとても失礼なことなのだと気づきました。「生きているだけでOK」という言葉がとても心に刺さりました。多様性やバラエティとは？をテーマにした講演だったと思いますが、“ふつうとはなんだろうか”と、とても考えさせられました。私にもできないことがたくさんあります。それなのに、障害を持っている方々ができないことに対して、かわいそうだとかマイナスのイメージで見ることが間違っていたのだと思いました。「政府がつくった障害者権利条約は、当たり前のこ

とが書いてある。普通学校の一角にある特別支援学校は、統合ではない。」このような本人の感想を聞いたのは初めてでした。障害を持って生まれた人の命もみんなと全く同じ重さだし、そのような人々は不幸などということは絶対ないです。社会を変えたいです。

(7) パネルディスカッション「当事者の座談会：学生生活と LGBT」

性的マイノリティの当事者、当事者かもしれない学生から構成される関西学院大学非公認サークル CASSIS に所属する現役生 3 名によって企画・実施されたプログラムであるパネルディスカッションが 5 月 16 日（木）の 18 時 40 分から 20 時まで、上ヶ原キャンパスの図書館ホールにて開催された（参加者：24 名）。パネルディスカッションは、自己紹介や LGBTQ に関する基礎知識、学生生活を含む日常的に経験する個人的な悩み、質疑応答といった流れで構成された。登壇者の 3 名はそれぞれ異なったセクシュアリティ（X ジェンダー、クエスチョニング、MTF トランスジェンダー）を自認し、個人的な経験を出発点としながら自らの思いや悩み、直面している問題などを語った。以下ではパネルディスカッションの中の一部を記す。

LGBT だけではないセクシュアリティ

X ジェンダーを自認する A さんは、あまり知られていない X ジェンダーについて「身体的性別にかかわらず、性自認が男にも女にも当てはまらない性」と定義して説明した。A さんは、出生時に割り当てられた性別は女性だが自分自身を「女性ではないが、男性になりたいわけではない」という性自認を経験している。性的マイノリティの代表例として LGBT が取り上げられることが多いが、LGBT 以外にも多様なセクシュアリティがあり、人の性自認や性的指向には「境界がない」と A さんは語った。

B さんは現在クエスチョニングを自認してい

る。クエスチョニングとは、「性自認や性的指向を探している状態」を指すセクシュアリティであり、Bさんの場合は性的指向がクエスチョニングであるという。これまではレズビアンであると自身で思い込んでいたが、大学入学以降様々な人と出会う中で「自分で自分のセクシュアリティを決めないことを選択した」と語った。BさんはLGBTコミュニティ内ではレズビアンとして、コミュニティ外ではヘテロセクシュアルとして認識されることがしばしばあり、どちらのコミュニティでも理解されないこともあるという。

男女で区別することは必要か？

AさんとMTFトランスジェンダーを自認するCさんは、当たり前のように男女で二分される仕組みに困難を覚えることが多いという。男女で二分される場面は、性自認と出生時の性別が一致しない、男女の既存のカテゴリーに当てはまらない性別を自認する人にとっては迷いや困難をもたらすことがある。Cさんは現在、大学のゼミ合宿と就活に関する悩みを抱えている。ゼミ合宿では部屋や風呂が男女分けになる可能性が高いことや、就活では戸籍上の名前と性別を変更していないことが大きな障壁になっているという。Aさんは、トイレや風呂、問診票などの身体に関することであれば「仕方ないかな」と思うものの、アンケートや履歴書などはどの性別を書くべきか悩むという。アンケートや書類などで不必要な性別欄は極力減らしていくこと、性別欄を設ける場合にはどの性別を聞いているのか（性自認、戸籍など）を明記していくことで、当事者が経験する困難を解消していくことに繋がるだろう。

親や親戚との関係性

LGBTQ当事者が抱える重要な課題の一つに親や親戚といった身近の人との関係性やそれに付随するカミングアウトに関する事柄がある。Cさんは、親との関係性は良く、カミングアウトもしているものの、関係性が良好すぎるがゆえに手術な

どに関する心配もされるという。Bさんは親にカミングアウトしておらず今後もする予定がない。親がLGBTに対して否定的な価値観を持っているが、「親は他人」だと思ふことで、楽になったという。

Aさんは、日常的には本名とは別で自分が呼ばれたい名前（通称名）を使用していることが多いという。親との関係性は良好ではあるものの、LGBTへの忌避感を持っているためカミングアウトはできないと感じており、今後も「平行線を辿ろうかな」と考えている。関学には通名制度があるが、通名制度を使用する場合には親などの家族が了承している必要があり、また関学から送られてくる郵送物には通名が記載される。つまり、家族にカミングアウトをし、理解を得ることがなければ、学内の通名制度を使用することは難しい。しかし身近な人のカミングアウトに対する拒否感が強い社会においては、親からの理解やサポートを得られるとは限らない。そのため、親などの家族からの理解を得られなくとも通名を使用できるような、より柔軟な通名制度を検討することが必要である。

誰も否定しないために

登壇者3名は小学校からLGBTQやジェンダーに関する教育を行うことの重要性を認識していた。Cさんは、自身の義務教育課程の中でLGBTQについて学ぶ機会が一切なかった。学校の中で取り扱われないことで、社会から望まれていない、目を背けられる存在としてトランスジェンダーである自分自身のことを否定的に感じてしまったという。当たり前の存在としての性的マイノリティを取り扱うことは、当事者が「堂々として生きていいんだ」、「普通に生きてていいんだって思える」ようになるために必要であると語った。また、Bさんは、他人を傷つけない限りにおいて自由に好きなことをしてもいいと考えており、そのためにはジェンダーのみならず、「～だから」といった様々な思い込みを解きほぐしていくこと

が重要であると語った。

ラベルを超えて

質疑応答の中で、「就職では何がストレスになるのか」、「どういう仕事・職場であれば働きやすいか」という質問が出た。この質問に対する登壇者の応答からは就職だけではなく、性的マイノリティの当事者もいきやすい大学を目指す上で重要なことが示されていた。Cさんは、アライを増やしていく取り組みやLGBT研修は大事である一方で、それが当事者の生きやすさを確実に保証するわけではないという。ではどのような関係性や場所であれば当事者を排除しないものとなりうるのか。Cさんは「LGBTだから仲良くする」ではなく、「気が合うから」仲良くなるような関係性が望ましいと語る。Aさんは、履歴書、スーツ、通名などで性別が二分化されることのない就活や職場が良いと思っているという。Bさんは「～だから」といったことやハラスメントのないような場所であれば、カミングアウトしていない当事者も生きやすくなると語った。

日常的に行われる決め付けから、制度に埋め込まれた性別二元論などを少しでも減らしていくことがLGBTQの当事者の経験する生きづらさの解消に重要だと、登壇者たちの語りからは示唆されているだろう。

なお、参加者からは以下のような感想をいただいた。

今まで、授業の中でジェンダーの話やLGBTの話は聞いたことがあったし、高校の時はFtMの人が講演をしてくださったこともありました。しかし、今日のように同世代の人からしっかり話を聞いたことはなかったもので、言い方はよくないかもしれませんが、すごく興味深く聞かせていただくことができました。性自認や性的指向が違うことや、LGBT、I,Q,X,A,Pなど様々あることは知りませんでした。そして、障

害者トイレが多目的トイレと呼ばれていることは知っていましたが、男女でわかれていたら意味ないということは本当にその通りだと思います。話を聞いていて、それぞれ悩みが違うこともあるし、共通する部分もあることがわかりました。どうすればよいかという意見は思いつきませんが、もっと差別や偏見がなくなること、そのためにまず知るということが大切なのかなと感じました。実際にすることは難しいだろうし、本人がどう感じるかとは思いますが、人ということには変わらないし、男か女かという極端な分類が薄まっていけばいいなと思いました。私は、私の友だちがそうであっても、友だちには変わらないし、大事な友だちだと思っています。

性自認について、Xジェンダーの性自認が場面や時間でゆらぐ(?)のは初めて知ったので驚きました。私は中学校の時に女の子から想いをよせられたりしたことで、セクシュアルマイノリティについて知りました。みんなが異性を好きになるわけではないことは知っていたけれど、「彼氏おるん?」とか、そういう発言は今でもしてしまう時があります。自分にしみついた価値観や偏見を変えることは本当に難しいなと日々感じています。小学校にボランティアで行っていますが、女の子が一人称を「ほく」と言ったことに対して、「〇〇ちゃんは女の子でしょ!?!」「私かうちやろー?」という返しがありました。小学校1年生のクラスでもうそういう男はこう、女はこうという価値観が根づいている子はたくさんいるんだと驚いたのと同時に、まだ多感でいろいろなことを吸収できるうちからジェンダー教育を行うことの必要性を感じました。小学校からジェンダー教育をとという話がちょうど出ましたが、ジェンダーの取り上げ方で、今は「道徳」の範囲でしか扱われていないのは問題だと感じています。他国では保健体育や生物学的な学問で取り上げられていると

いうのを知って、言葉では言い表せないのですが、「道徳」で扱うのに違和感があります。セクシュアリティについてマイノリティの方に対してどう接したらいいんだろう？とか、何に気をつければいいんだろう？とか、たくさん考えすぎて、もはや接するのが怖いくらいに思っていたんですが、大学に入って当事者の子に会って、「人」として接すればいいんだと最近思っています。LGBT だからとか関係なくセクシュアリティに関する質問や発言は非常にセンシティブであることは認識すべきだし、これからも自分の偏見とは闘っていかないと思っています。

ありがとうございました。今回、関学キャリアセンター職員としてもそうですが、一個人として一人ひとりが輝く未来を描くために私はどんなことができるのか、そのヒントをもらうために参加させていただきました。ただ、自分自身の認知も甘く、まだまだ知る必要性を感じました。今日は大変勉強になりました。

(8) 多様な性を祝う集い

関学レインボーウィークの最終日の5月17日(金)の18時30分からは、「誰もが、自分の性を隠すことなく、弁明することなく、説明することなく、あるがままで、各々の性を喜び祝い合えるような場に」をテーマに、ランバスチャペルにおいて2年ぶりに「多様な性を祝う集い」が開催された(岡嶋, 2019)。今年度のプログラムは以下のようなものであった。

- 1 オープニングソング「だいじょうぶ」
- 2 メッセージ
- 3 参加型プログラム「お花で虹を描こう」
- 4 榎本てる子先生を覚えて
- 5 エンディングソング
「We shall overcome」
「Over the rainbow」

とりいしん平さん(近江平安教会)のギターによる伴奏のもと本学卒業生の岡嶋千宙さんが「♪…どんなことがあっても あなたはあなたのままで 素敵すぎるほどに 素敵なんだからね…だいじょうぶ だいじょうぶ 何があっても だいじょうぶ だいじょうぶ あなたは あなたで♪」と、オープニングソング「だいじょうぶ」(作詞: 岡嶋千宙、作曲: とりいしん平)を歌いあげて、28名の参加者があった今年のプログラムがスタートした。続くメッセージでは、教員、在学生、卒業生、学外の方を含めた参加者から、自分自身の経験、出会いを通しての気づきなどを語っていただいた。参加型プログラム「お花で虹を描こう」では、参加者全員が色とりどりの花を土台となるオアシス(生花用吸水スポンジ)に挿していくことで、多様なセクシュアリティの象徴でもある「虹」を創っていった。

続く「榎本てる子先生を覚えて」では、関学神学部の教員としてKGRWの開始当初からずっとかかわっていただき、2018年4月に急逝した榎本てる子先生を覚える企画が行われた。オープニングでも登場していただいたとりいさんによるオリジナルソング「テルちゃんブギ」に続いて、榎本先生の元ゼミ生たちが制作した先生との思い出のスライドショーが流されたあと、学生と榎本先生の親友の方から思い出が語られた。そしてエンディングでは、社会学部宗教主事の打樋先生のギターのリードのもと、榎本先生の好きだった「We shall overcome」と「Over the rainbow」を参加者全員で合唱して、今年のプログラムは終了した。

参加者からは以下のようなメッセージをいただいた。

てる子先生の思い出を語ってくださったキムさんのお話の中で、てる子先生の大切にされていた思い、“必要とされる場所に届ける”という事に強く感銘を受けました。私たち一人ひとりが存在すること、また互いに出会えること、そして互いを大切に思い合えることのすばらし

さ、また楽しさをあらためて確認し、喜ぶことができました。また明日からも、私たち一人ひとりの多様性を喜び、分かち合いながら過ごしていきたいと思います。

大学一回生の時から気になっていました。今回初めて参加しましたが、もっと早くから参加しておけばよかったと思いました。“多様性”という言葉が響き合う社会ですが、性の多様性に関してはまだまだ理解が浅いように感じます。この関学のレインボーウィークが何かみんなが考えるきっかけになる（全国的に）ようになってほしいなと思います。多様な社会で生きる一人の人間として互いに認め合いながら過ごしていける社会になりますように私も力になればと今日思いました。

参加者からのメッセージで感動するお話を聞けてとてもよかったです。来年以降も関学レインボーウィークをぜひ続けてほしいです。

とても心に残る会でした！てる子先生が照れながら、いや嬉しそうに、このチャペルをとびまわっていると思いました！卒業生として関学にきてよかった！この性でうまれてよかった！心からそう思います。ありがとうございました。

2. 関学における多様性尊重のためのソーシャルアクション

昨年度のKGRWの報告文（武田，2019）で紹介したように、これまで人権教育研究室が主体となって実施してきた関学における多様性尊重のためのソーシャルアクションの成果である「学内のトイレの名称・表記」に関しては、今年度前半に改修された第4別館と上ヶ原キャンパスの図書館の1階以外に設置されている多目的トイレにおいて、現状のピクトグラムに加えて「多目的トイレ」という表記がすでにつけられている（2019年12

月現在）。また、残りの建物の2階以上の多目的トイレに関しても、2020年3月頃にフィッティングボードを設置し、表示も車いすマークだけのところは改修し、フィッティングボードのピクトグラムと「多目的トイレ」の表記が掲示される予定である。

また、「関西学院インクルーシブ・コミュニティ実現のための行動指針」の制定に関しては、2019年3月19日に行動指針の冒頭に書かれている「関西学院インクルーシブ・コミュニティ実現のための基本方針」の部分だけが公表された。

「関西学院インクルーシブ・コミュニティ実現のための基本方針」

関西学院は、多様性（ダイバーシティ）を力とする「垣根なき共同体」をめざして「インクルーシブ・コミュニティ構築に向けて」という宣言文（インクルーシブ・コミュニティ宣言）を、2014年に策定した。このインクルーシブ・コミュニティを実現するため、「インクルーシブ・コミュニティ実現のための基本方針」を以下のとおり策定する。

1. 男女共同参画促進

関西学院のすべての活動において、ジェンダー（社会的・文化的な性差）を考慮しながら、男女共同参画を促進する。

2. 性的指向や性自認の多様性（SOGIの多様性）の尊重

性的指向（Sexual Orientation）や性自認（Gender Identity）の多様性が尊重され、すべての構成員が教育・研究・服務の場において十分に能力を発揮できるような支援策を推進する。

3. 障がいがある構成員支援の実施

学院内の関連部署や学外機関との密接な連

携の下で、障がいのある構成員が、コミュニティの一員として尊重され、障がいがない構成員と同様に教育・研究・サービスの場において十分に能力を発揮できるようなインクルーシブなコミュニティ作り実現を推進する。

4. 文化的多様性の尊重

国籍・民族・言語などの文化的多様性が尊重され、すべての構成員が教育・研究・サービスの場において十分に能力を発揮できるような支援策を推進する。

5. インクルーシブ・コミュニティ推進施策を着実に実施

インクルーシブ・コミュニティ構築という学院の方針を学院内外へ向けて明確に発信すると共に、インクルーシブ・コミュニティ推進施策を着実に実施する。

基本方針以外の「関西学院インクルーシブ・コミュニティ実現のための行動指針」に関しては、2019年度の春学期に大学側と文言の調整を行い、2020年度に公開をすることが決定した。この行動指針の中には、学院全体をインクルーシブ・コミュニティへと促進させていくためのインクルーシブ・コミュニティ推進協議会の設置が明記されており、この協議会に関しても2020年度に設置されることが確約された。

3. Kwansei Grand Challenge 2039 にむけて

関西学院は、創立150周年を迎える2039年を見据えた関西学院のありたい姿・あるべき姿を示す「超長期ビジョン」と、それを実現するための前半10年間(2018-2027)の方向性を示す「長期戦略」からなる「Kwansei Grand Challenge 2039」を2018年2月に発表している。その超長期ビジョンの中の「総合学園と一環教育」というテーマのもと、長期戦略テーマ「関西学院のアイデンティ

ティ共有」が位置づけられている。この「関西学院のアイデンティティの共有」の実現のため、2014年3月に発表された「関西学院大学人権教育の基本方針」に基づき「関西学院全体での人権教育の推進」を、また同じく2014年に発表された「インクルーシブ・コミュニティ構築に向けて」という宣言文に基づいて「インクルーシブ・コミュニティ構築」の実現を目指していくことが計画されている。

関西学院では、昔から各学校で、大学でも1970年代より積極的に人権に関連する教育や研究に取り組むとともに、多様な背景の生徒・学生を積極的に受け入れてきており、国内では人権教育に関するリーダー的な存在となっている。こうした本学院の強みをさらに高める「新たな展開」として、「インクルーシブ・コミュニティ実現のための行動指針」を制定し、学院内にインクルーシブ・コミュニティ推進協議会を設置して、吉岡記念館事務室(人権教育研究室担当)が事務局を担い、幼稚園から大学まで、またダイバーシティ推進本部などの学院の各部署と有機的に連携することによって、人権教育およびインクルーシブ・コミュニティ構築を推進していく。具体的には、人権教育の推進に関しては、各学校や学部で行われている人権教育に関するデータベースを構築することで、今まで以上に効率的・効果的に展開していくことを目指したいと考えている。一方、インクルーシブ・コミュニティ構築に関しては、多様な背景を有する卒業生のライフストーリー集を作成することによって生徒や学生にキャンパス内の生活や進路に関するロールモデルを提示するとともに、キャンパス内の多様性を可視化していくことを目指す。また、教職員研修を実施することによって、実際にインクルーシブ・コミュニティ構築の基礎を築いていく。こうした計画されている取り組みは、もちろん学院からの財政的な支援がなければ実現は困難であるが、創立150周年の2039年を待たずして、以下の夢の実現に結びつくことを心より願っている。

私には夢がある。いつの日か関学が立ち上がり、2014年にグローバル院長(当時)が制定した「このコミュニティに集うすべての者—学生・生徒・児童・園児、教員、職員、同窓、およびその家族—は、性別、年齢はもとより、国籍、人種、民族、出身地、主たる言語、宗教・信仰、身体的・精神的特徴、セクシュアリティ、あるいは経験や知識、文化や学問的背景などを異にしています。関西学院は、こうした違いのあることを尊び、この『多様性(ダイバーシティ)』こそが私たちのコミュニティの強さであると信じています」というインクルーシブ・コミュニティ宣言が、真の意味で実現されることを。私には夢がある。いつの日か、すべての学生および教職員が、SOGIではなく人格で評価されるキャンパスとなることを。

参考文献

岡嶋千尋(2019)「関西学院大学レインボーウィーク『多様な性を祝う集い』—存在、出会い、共生」『音楽と礼拝』183号, 36-40.

武田丈(2019)「キャンパスにおける多様性尊重にむけてのソーシャルアクション：第6回関学レインボーウィークを振り返って」『関西学院大学人権研究』23, 41-45.